実践研究

知的障害や発達障害をもつ高校生への ドメスティック・バイオレンス（DV）予防教育の挑戦

須　賀　朋　子
酪農学園大学

Challenges in Domestic Violence (DV) Prevention Education for High School Students With Intellectual or Developmental Disabilities

Tomoko Suga
Rakuno Gakuen University

抄録

交際相手間で起こるドメスティック・バイオレンス（DV）は、デートDVと呼ばれ、若年層を中心に近年増加傾向にあり、特に知的障害・発達障害がある生徒がデートDV被害に巻き込まれていることが社会的な問題となっている。本研究では、知的障害・発達障害特別支援学校、学級の教員７名に、インタビュー調査（調査１）を行った。その結果、教員全員からDV予防教育が必要という回答が得られた。理由として、特に高等部の生徒がデートDVや性被害に遭っていること、被害を受けていても気づいていないこと、アダルトビデオの情報を信じ込んでしまう生徒が多いことが挙げられた。また、予防教育を作成するときに、生徒の知的能力を考慮する必要があった。

軽度の知的障害あるいは発達障害がある生徒が通学する高等支援学校で、DV予防の介入授業を行った（調査２）。生徒のアンケート結果からは、DV予防教育を受けて良かったと思っていることが統計的にも示された。さらに、「どういうことが暴力か？」という踏み込んだ内容も理解していた。しかし、デートDV被害を受けたときに、誰かに相談できる生徒は65.8％にとどまり、それ以外の生徒は自分からは相談できない状況であった。

今回は、高等支援学校1校での介入授業であったため、あくまでパイロット研究と考えている。これから、介入授業を行う高等支援学校を増やして、更なる検討が必要であろう。

キーワード：知的障害・発達障害、DV予防教育、特別支援学校、高等支援学校

Abstract

As the victims of domestic violence (DV) increases in young people, there are some who become involved because of their intellectual and developmental disabilities. In the present study, we conducted an interview (study 1) with seven homeroom teachers at a special needs school for children with intellectual or developmental disabilities and received a response from all teachers that preventative education on DV is necessary. The reasons included high school students were especially prone to DV and sexual abuse, they were often unaware of the abuse they were experiencing, and many students believed information from adult videos. It was also noted that intellectual capacity of students must be considered when preparing the preventative education.

We taught an intervention class on DV at a special needs high school for students with mild intellectual and developmental disabilities (study 2). The questionnaire conducted on students statistically showed that students were in favor of the DV prevention education. In addition, they were able to understand a complex idea of “what is violence”. However, only 65.8% of students said they would consult someone if they became a victim of such violence, leaving other students unable to consult someone on their own volition.

Since the present study was limited to an intervention class at one high school, it is a pilot study. We need to continue with the intervention class at other special needs high schools and examine its impact.

Key words：Intellectual Disability, Developmental Disability, DV Prevention Education, Special Support School, Higher Support School

受付日：2020年６月15日　再受付日：2020年７月１日　受理日：2020年７月２日

Ⅰ．はじめに

近年、知的障害や発達障害（以下、知的・発達障害と記す）の原因の一つに、子ども時代に受けた虐待や、面前ドメスティック・バイオレンス（DV）があげられている[1)]。また、知的能力に問題がなくても、虐待やDV家庭であることが原因で情緒不安定になり、対人暴力を起こし、学校に行けなくなり、学習面での遅れが生じる生徒が存在している[2)]。米国では知的・発達障害とDVの関係も指摘され始めているが[3)]、症例数が十分ではなく、証明されるには至っていない[4)]。知的・発達障害を抱えて大人になった人の話から、子ども時代に虐待やDVを受けていたことが疑われる症例が数多くみられるようになってきている[5)]。

日本でもDV、ストーキング、高齢者虐待、児童虐待、性的虐待は増加しており、知的・発達障害がある人は、DVや犯罪に巻き込まれる可能性は高い[6)]。そこで、知的・発達障害がある高校生にDV予防教育を行うことを試みた。教材を作成するにあたり、調査1で、知的・発達障害の特別支援学校または支援学級の先生にインタビュー調査を行い、生徒に起きていることの実態、DV予防教育に、どのような内容を組み入れるとよいと思うかを明らかにした。

次に、知的・発達障害の生徒たちを対象とした高等支援学校において、DV予防教育のための授業を行い、直後に生徒にアンケート調査を行いDV予防教育の効果を検討する。

Ⅱ．研究方法

1．研究デザイン

まず最初に、知的・発達障害特別支援学校または学級の教員へのインタビュー調査を行い、生徒の実態把握を行う（調査１）。

次いで、知的・発達障害がある生徒が通う、高等支援学校でDV予防の介入授業を実施し、授業を受けた生徒へのアンケート調査（調査２）によって効果を検討する。

2．対象と分析方法

1）調査１

調査１では、A県、B県の知的・発達障害特別支援学校または学級の教員７名（表１）に半構造化面接を行い、ICレコーダーに録音（約５分）し、質的統合法で分析を行った。

質問項目は「①生徒がデートDV被害を受けたことを聞いたことがあれば、具体的に話してください。②生徒が虐待を受けていたり、DV家庭であることを感じることがあれば、具体的に話してください。③知的・発達障害特別支援学校や学級で、DV予防教育は必要だと思うか？どんな内容を盛り込んだほうが良いか、教えてください。」の３項目を質問した。

調査１で得たデータから作成した逐語録を精読し、「知的・発達障害特別支援学校・学級の生徒が受けたデートDV」、「虐待を受けていたり、DV家庭であることをどのように知るか」、「DV予防の必要性と内容」に関する文節を抽出し、ラベルとした。質的統合法を用い、意味内容の類似性に従い分類し、抽象度を上げるごとに小表札＜ ＞、中表札「 」、大表札【 】として表示した。分析は著者と、教育学を専攻する修士課程の学生の間で繰り返し検討し、妥当性・信頼性の確保に努めた。

表１　研究協力者教員

ID	A	B	C	D	E	F	G
性別	女	男	女	女	女	女	女
知的障害児教育経験年数	20	10	14	21	15	20	14

2）調査２

調査２では、C県にある知的・発達障害のある生徒が通う、高等支援学校（障害者手帳を持っているか、中学まで通級学級や特別支援学級に通学していたことが入学の条件となる）において、DV予防の介入授業を行った。

対象は、高校生１年生から３年生までの33名（男18、女15）で、パワーポイントを使用して60分間の授業を行った。

DV予防授業の資料はパワーポイントで作成し（表２）、内容の概略は下記の通りである。①人との出会いについて、②デートDVに至る場面のストーリー（男子編と女子編）、③お互いを尊重するとはどういうことか？④暴力の種類、⑤暴力のサイクル、⑥DVの定義、⑦DV被害者の数、⑧DVは誰にでも起こりえること。

授業のなかで、④暴力の種類（図１、２）と⑤暴力のサイクル（図３）を特に時間をかけて、丁寧に説明を行った。

授業後、アンケート用紙を生徒に配布し記入を依頼した。アンケートの内容は、下記の通りである。

(1) デートDVについて

①デートDVについて知ってよかったか？〔よかった・どちらかといえばよかった・どちらかといえばそう思わない・そう思わない〕、

②授業後、デートDVが自分に関係のあることだと思ったか？〔関係のあることだと思った・少しは関係あると思った・あまり関係があることだと思わなかった・自分にはやっぱり関係ないことだと思った〕

各問、いずれか1つを選ぶこととした。

(2) 交際相手との間で次のような行為があったとき、その行為を暴力だと思うか？

①殴ったりけったりする、②怒鳴る、③長時間無視する、④メールチエックや友達づきあいを制限する、⑤交際費をいつも払わせる、⑥避妊に協力しない。

①から⑥まで〔そう思う・どちらかといえばそう思う・どちらかといえばそう思わない・そう思わない〕のな

かから、各問、１つを選ぶこととした。

(3) あなたが交際した場合、次のようなときに自分はどのように対応するか？

①交際相手と意見が合わないとき〔自分の意見に従わせる・話し合いで決める・自分の意見を言うが相手に合わせる・相手に合わせる〕

②交際相手に腹だったとき〔非難する・無視する・がまんする・自分の気持ちを言葉で伝える〕

③暴力を振るったとき〔あやまる・あやまらない・交際をやめる〕

④暴力を振るわれたとき〔やめてという・やり返す・がまんする・にげる〕

⑤暴力を振るわれたら相談するか〔誰にも相談しない・気づいてもらえるようにふるまう・誰かにメールなどで相談する・誰かに直接相談する〕

各問、いずれか１つを選ぶこととした。統計分析はすべてIBM SPSS statistics 22.0を使用して、Kruskal-Wallis検定で行った。

表２　DV予防の授業内容

１．人との出会いについて
２．デートＤＶに至る場面のストーリー（男子編と女子編）
３．お互いを尊重するとはどういうことか？
４．暴力の種類
５．暴力のサイクル
６．DVの定義
７．DV被害者の数
８．DVは誰にでも起こりえること

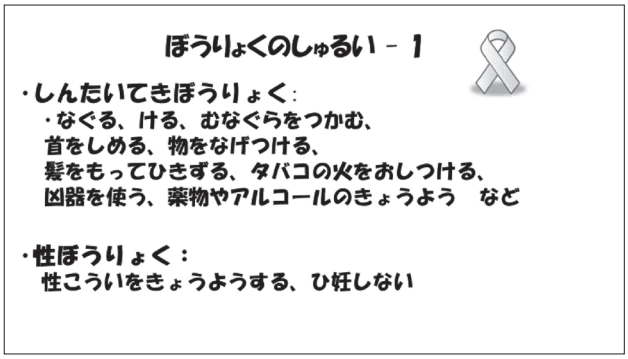

図１　暴力の種類-1

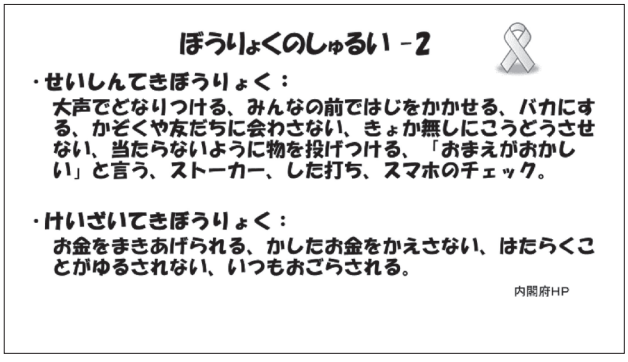

図２　暴力の種類-2

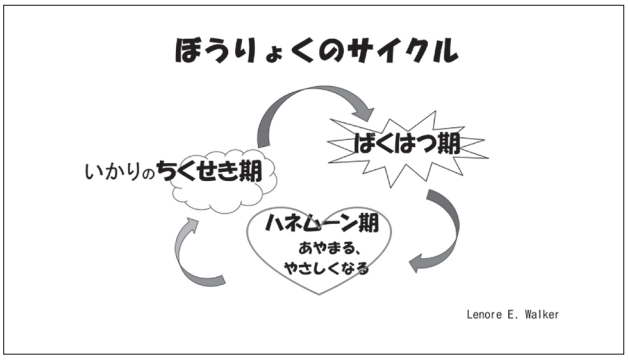

図３　暴力のサイクル

３．倫理的配慮

調査１、調査２を行うにあたり、研究協力者に、研究の趣旨と協力の依頼を口頭と文書で説明した。研究協力は自由意志に基づき、任意性を保障した。本研究は酪農学園大学人を対象とする医学系研究倫理審査委員会承認を得て行った（承認番号18-2）。

Ⅲ．結果

１．調査１

教員７名へのインタビュー調査から抽出された「知的・発達障害特別支援学校・学級の生徒が受けたデートDV」を（表３）に示した。

【高等部】では、「性行為の強要」が＜駅の障害者トイレで無理やり性行為＞、＜公園の障害者トイレで社会人に性行為をされたことを自慢げに話す＞、<家で無理やり裸にされた＞、＜殴る蹴るの後、女子生徒が性行為を受け入れる＞が起きていた。「精神的暴力」では＜裸の写真を送れと男子生徒に命令されて女子が送ってしまった＞が挙げられた。【中等部】では＜上級生が校内で下級生に性行為＞が起きていることがわかった。

特別支援学校・学級の教員は、「生徒が虐待を受けていたり、DV家庭であることをどのように知るか」（表４）は、【学校内外の関係者】として「下級の学校からの申し送り」で＜児童相談所に保護されたことがある＞という情報から知ること、「児童相談所」や「市の子ども支援課」からは＜虐待や家庭の状況を教えてくれる＞ことがわかった。また【保護者】である「母親」の＜主人から暴力を受けているから＞、＜主人が許さないから＞という言葉から、DV家庭であることを感じ、「親の知的問題」で＜家庭に指導が入らない＞、＜親が身体的、言葉、性的な暴力＞をしていることから虐待を予測することができることがわかった。【子どもの様子】からは「行動」では＜トイレ介助のときよろめいたので抑えようと思ったら身をかがめた＞、＜距離感がおかしい、やたらとベタベタしたり、過剰反応したり＞、＜注意するとフリーズする＞、＜些細なことで暴力がでる＞が挙げられ、「言葉」では＜パパがママを叩く＞、＜叩かれたという＞、＜どうせ大人は、お前ら仕事だからでしょが口

癖＞から、DV家庭や虐待を疑っていた。また「着替えの場面」で＜あざを発見しやすい＞ことも挙げられた。

特別支援学校・学級の教員は【DV予防教育は知的障害がある生徒に必要】（表５）と７名全員の教員が答え、内容を考えるときに「生徒の知的能力を考える必要」の指摘があり、＜DVの正しい情報＞、＜暴言暴力は絶対にいけない＞、卒業後に＜職場で性暴力を受ける人が多い＞、＜セルフチェックができるようにしたい＞、＜自分で助けを求めることができない生徒が多い＞ことを考慮してほしい要望があった。また、「大人と子どもの絆を作る必要」で、＜安心した居場所、信頼できる仲間をつくる経験を積ませたい＞、＜信頼できる大人に助けを求めていいんだよということを教えたい＞ことが示された。

２．調査２

調査２では、Ｃ県にある知的・発達に障害がある生徒が通う、高等支援学校でDV予防の介入授業を行い、授業後にアンケート調査を行った。

「１．デートDVについて知ってよかった？」という問いには、「良かった」という評価が有意に高かった。

しかし、「２．授業後、デートDVが自分に関係のあることだと思ったか？」という問いの回答には、回答間で有意な差がみられず、意見が生徒のなかで割れた。授業のなかで「誰にでも起こりえること」を強調したが、知的・発達障害のある高校生にとっては、関係があることだと思った生徒もいれば、自分にはやっぱり関係ないことだと思った生徒がいた（表６）。

「交際相手との間で次のような行為があったとき、そ

表３　知的特別支援学校・学級の生徒が受けたデートDV

大表札	中表札	小表札
高等部	性行為の強要	駅の障害者トイレで無理やり性行為
		公園の障害者トイレで社会人に性行為をされたことを自慢げに話す
		家で無理やり裸にされた
		殴る蹴るの後、女子生徒が性行為を受け入れる
	精神的暴力	「裸の写真を送れ」と男子生徒に命令されて女子が送ってしまった
中等部	性行為の強要	上級生が校内で下級生に性行為

表４　虐待を受けていたり、DV家庭であることをどのように知るか

大表札	中表札	小表札
学校内外の関係者	下級の学校からの申し送り	中学部から「この子は虐待で児童相談所に保護されたことがある」
	児童相談所	虐待や家庭の状況を教えてくれる
	市の子ども支援課	
保護者	母親	「私が主人から暴力をうけているから」と言う
		「主人が許さないから」と言う
	親の知的問題	保護者が知的障害であるため家庭に指導が入らないことが悩み。親が身体的、言葉、性的な暴力をする
子どもの様子	行動	トイレの介助のときよろめいたので、抑えようと思ったら身をかがめた
		高等部の子で人との距離間がおかしい、やたらとベタベタしたり、過剰反応をしたりする子がいて、DVでの離婚家庭であった
		注意されるとフリーズする
		些細な事で、すぐに暴力がでる。頻度と強度が高く、暴力の家庭背景があるかなと感じる
	言葉	「あっち行け」と繰り返す子がいて、家で「あんたはあっちに行って」と言われて育ったようだ
		本人が「パパがママをたたく」と言う
		言葉で「叩かれたんだ」という
		「どうせ大人は」「お前ら仕事だからでしょ」が口癖の子がいた
		小学校低学年とは思えない怖い言葉を使う
	着替えの場面	着替えの場面あざなど、発見しやすい

表５　知的障害のある生徒へのDV予防教育の必要性と内容

大表札	中表札	小表札
DV予防教育は知的に障害がある生徒に必要	生徒の知的能力を考える必要がある	「こういうことがDV」という正しい情報を教えたい
		暴言暴力は絶対にいけないと言っている
		職場（アルバイト先など）で性暴力を受けることが多い
		「自分が受けていることは暴力だ」というセルフチェックができるようにしたい
		自分で助けを求めることができない生徒が多い
	大人と子供の絆を作る必要がある	安心した居場所、信頼できる仲間をつくる経験を積ませたい
		信頼できる大人に助けを求めていいんだよということを教えたい

の行為を暴力だと思うか？」（表７）の質問に対して、殴る、蹴る、怒鳴る、長時間無視する、メールチエックや友達づきあいを制限する、交際費をいつも払わせる、避妊に協力しない、のすべてで「暴力だ」という認識が統計的にも有意に定着した。

「あなたが交際した場合、次のようなときに自分はどのように対応するか」（表８）という質問で、１）交際相手と意見が合わないときは、「話し合いで決める」が統計的に有意に高いが、２）交際相手に腹だったときは「がまんする55.9％」という回答が統計的に有意に高かった。３）暴力を振るったときは「謝る」という回答が統計的に有意に高かったが、４）暴力を振るわれたときは「やめてという38.2％」、「やり返す17.6％」、「我慢する26.5％」、「逃げる17.7％」で、回答間に統計的な有意差はみられなかった。５）暴力を振るわれたら相談するかでは、「誰にも相談しない25.7％」、「気づいてもらえるようにふるまう17.1％」、「誰かにメールなどで相談する17.1％」、「誰かに直接相談する40.1％」で、回答間に統計的な有意差はみられなかった。

Ⅳ．考察

知的・発達障害特別支援学校・学級の教員へのインタビュー調査（調査１）から、高等部の生徒がデートDVや性被害に巻き込まれていることが多くあることが明らかとなった。

知的・発達障害が原因で自分の身に起こっていることがわからず、性行為を強要された女子生徒が自慢げに話す事例や、性暴力を受けていることに気づいていない生徒が多く存在することが調査からわかったことである。また、知的・発達障害のある生徒たちに、DV予防の教育が必要であることを、調査協力をしてくださった教員は、全員が認識をしていた。

また、性行為の強要が、学校内（中学部）であったことが調査からわかったが、高等部の生徒の場合は、駅や公園の障害者トイレが事件の場所として挙げられていることから、地域に住む大人たちは、公共施設の障害者トイレが、性犯罪の場所になってしまっていることを認識する必要があるだろう。DVにおいて、警察官側が求め

表６　デートDVについて

１．デートDVについて知って良かったか？	良かった 72.8	どちらかと言えば良かった 21.2	どちらかと言えばそう思わない 3.0	そう思わない 3.0	*p<.001*
２．授業後、デートDVが自分に関係のあることだと思ったか？	関係ある事だと思った 24.3	少しは関係あると思った 24.2	あまり関係があることだと思わなかった 27.3	自分にはやっぱり関係ないことだと思った 24.2	*n.s.*

n=33，数字は％

表７　交際相手との間で次のような行為があったとき、その行為を、暴力だと思うか

	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	
１．殴ったり蹴ったりする	77.1	11.4	2.9	8.6	*p<.001*
２．怒鳴る	55.9	26.5	2.9	14.7	*p<.001*
３．長時間無視する	41.2	38.2	8.8	11.8	*p<.01*
４．メールチエックや友達づきあいを制限する	52.9	20.6	11.8	14.7	*p<.01*
５．交際費をいつも払わせる	55.8	26.5	5.9	11.8	*p<.001*
６．避妊に協力しない	64.7	14.7	8.8	11.8	*p<.001*

n=33，数字は％

表８　あなたが交際した場合、次のようなときに自分はどのように対応するか

１．交際相手と意見が合わないとき	自分の意見に従わせる 5.7	話し合いで決める 57.1	自分の意見を言うが相手に合わせる 20.1	相手に合わせる 17.1	*p<.001*
２．交際相手に腹だったとき	非難する 2.9	無視する 14.7	がまんする 55.9	自分の気持ちを言葉で伝える 26.5	*p<.001*
３．暴力を振ったとき	謝る 66.7	あやまらない 9.1	交際をやめる 24.2		*p<.001*
４．暴力を振われたとき	やめてという 38.2	やり返す 17.6	我慢する 26.5	逃げる 17.7	*n.s.*
５．暴力を振われたら相談するか	誰にも相談しない 25.7	気づいてもらえるようにふるまう 17.1	誰かにメールなどで相談する 17.1	誰かに直接相談する 40.1	*n.s.*

n=33，数字は％

ていることは、協力、理解、要望の３つであるという研究もあり[7]、公共施設の障害者トイレへの見回りを、警察官に協力することもできるだろう。いずれにしても、教員だけでなく地域で、知的・発達障害がある生徒が、性犯罪に巻き込まれることを防ぐために、公共施設の障害者トイレは注視する場所であることが、結果から考えられた。

知的・発達障害がある生徒たちが、虐待、面前DV被害を受けていることは、学校内外の関係者である下級の学校や、市の子ども支援課などから、情報として提供されていること、その他、教員は、母親の言葉から虐待や面前DV被害を察知していることもわかった。

さらに、教員は保護者の知的な問題による子どもの被害にも悩まされていることが考えらえた。これは、山田ら[8]が病院での調査で、医療関係者が、虐待への対応に苦慮している部分と重なってくる。医療従事者や特別支援学校・学級の教員の苦労は、保護者支援への比重が高いことが、本調査と先行研究から考えられるであろう。

教員は子どもの様子から、虐待・面前DV被害を察知をしていることも多く、トイレの介助のとき、身をかがめた行動や、ベタベタしてくる行動、「パパがママを叩く」という言葉など、生徒の行動や言葉に注意して、知的・発達障害がある生徒の家庭の様子に気を付けていることが考えられた。知的・発達障害がある生徒たちは、本人自身で気づくことができないことが多いため、教員が、生徒の行動や言葉で気づくことは、とても大切なことであると思われる。

しかし、生徒のために一生懸命に対応をしていても、「どうせ大人は」や、「お前ら仕事だからでしょ」という言葉を教員は浴びせられることもあり、これらの点を考えても、DV、暴力予防教育を、知的・発達障害の生徒たちに実施することが必要であろう。高等部を卒業後、社会にでてからデートDVや性被害の被害者や加害者になってしまうことも考えられることから、早い時期からの繰り返しの予防教育が必要であるだろう。

知的・発達障害特別支援学校・学級の教員は、生徒に、DVの正しい知識、セルフチエックができるようにさせたいということを望んでいることがわかったことから、DV予防教育のパワーポイント教材を作成し、知的・発達障害の生徒が通学する高等支援学校で、介入授業を行った。デートDVの授業を受けて良かったと思った生徒が、統計的に、有意に多いことが示されたが、自分に関係があることかどうかの認識は、生徒１人１人が異なっていた。「だれにでも起こりえること」ということは、高等支援学校の生徒には、伝わり切れず、全生徒への注意喚起までには至らなかったと思われる。

次に、高等支援学校の生徒に、丁寧に、時間をかけて説明をすれば、具体的な暴力の種類については、理解ができることが示された。殴る、蹴る、怒鳴る、長時間無視する、友達づきあいを制限する、交際費をいつも払わせる、避妊に協力しないことの全項目において、高等支援学校の生徒は理解することができた。この結果は、DV、暴力予防教育を行うことが重要であると言っても良いだろう。なぜなら交際相手と意見が合わないときには、話し合いで決めること、暴力を振るったときは謝ることが、支援学校の高等部の生徒が、有意に認識できたことは大切である。

しかし交際相手に腹がたったときや、暴力を振るわれたときは、「我慢をする」という回答が一番多かったことは今後の課題として残された。また、暴力を振るわれたときに相談できる生徒が57.2％にとどまり、それ以外の生徒は、「だれにも相談しない」か「気づいてもらえるようにふるまう」と回答した点も、繰り返しの教育の継続が必要であると思われる。

本調査は、軽度の知的・発達障害の生徒が通学する一つの高等支援学校での介入結果であるため、あくまでパイロット研究という位置づけである。教員へのインタビュー調査の結果から得られた、「生徒の知的能力を考える必要がある」ことを常に念頭において、教材に修正を加えながら、今後、多くの学校で介入授業を行い、理解しているか否かの確認をしていく必要があると思われる。

Ⅴ．結語

本研究では、知的・発達障害特別支援学校、学級の教員７名に、インタビュー調査を行った結果、全員の教員からDV予防教育が必要であるという回答が得られた。理由として、特に高等部の生徒がデートDVや性被害に遭っていること、被害を受けていても気づいていない生徒がいることが挙げられた。予防教育を作成するときに気を付けることとして、生徒の知的能力を考える必要があることが挙げられた。

また、特別支援学校・学級の教員は、生徒が虐待や面前DV被害を受けていることが多いことを、生徒や保護者の言動、学校関係機関からの情報から得ていることも明らかとなった。

その後、軽度知的・発達障害の生徒が通学する高等支援学校においてDV予防の介入授業を行った。DVの知識や、暴力の種類について、時間をかけて、丁寧に説明を行った。生徒のアンケート結果から、DV予防教育を受けて良かったということが示され、さらに、「どういうことが暴力か？」という踏み込んだ内容まで理解できていることが分かった。しかし、デートDV被害を受けたときに相談できる生徒は65.8％にとどまり、それ以外の生徒は自分からは相談できないと回答している。

今回は、１校の高等支援学校での介入授業であったが、今後、他の高等支援学校で実施するときは、あらかじめ生徒の知的能力の状況を教員から説明をうけてから、教員の要望に沿って、DV予防教育を行う必要があろう。

謝　辞

本研究は科研費若手調査18K18294で実施した。調査に協力いただいた皆様に感謝申し上げる。また、英文抄録において、Editage Co.にご指導いただいた。

COI

論文投稿に関連し、開示すべきCOI関係にある企業などはない。

引用文献

1）藤岡良幸．DV被害者の現状と課題.東筑紫短期大学研究紀要49：95-114，2018.
2）加来洋一．対人暴力の予防に有効な介入とは？－精神医学の観点から－．日本セーフティープロモーション学会誌12（2）：1-12，2019.
3）Rizo, C.F., Irang, K., Dababnah, S., et al. The Intersection of Intellectual and Developmental Disabilities with Child Exposure to DV: Implocations for Research and Practice. Journal of Family Violence, 2020. https://doi.org/10.1007/s10896-020-00138-4 （2020/5/31検索）
4）Dababnah, S., Rizo,C.F., Campion,K., et al. The relationship between children's exposure to DV and intellectual and developmental disabilities: a systematic review of the literature. *American journal on intellectual and developmental disabilities*, 123（6）：529-544, 2018.
5）Dababnah,S., Olson, E.M., Nichols, H.M. Feasibility of the incredible years parent program for preschool children on the autism spectrum in two U.S. sites. Research in Autism Spectrum Disorders, 57：120-131, 2019.
6）Noriko Yamda, Nobuo Yoshiike. Support for Victims of Domestic Violence in Japan: Difference in Correspondence of Hospitals During Consultation Between Daytaime and Nighttime Visit. Japanese Journal of Safety Promotion 12（1）：27-34, 2019.
7）鈴木真人、山田典子．DV事犯等の対応で警察官が医療機関に望むこと．日本セーフティープロモーション学会誌．11（1）：37-42，2018.
8）山田典子、鈴木美里、田村真通、他．児童虐待防止プログラムとサービス開発への提案～N病院子ども虐待防止対策委員会の発案より～．日本セーフティープロモーション学会誌．13（1）：8-14，2020.